

Citation: Jacobs WCH, Anderson PG, van Limbeek J, Willems PC, Pavlov P. Single or double-level anterior interbody fusion techniques for cervical degenerative disc disease. *Cochrane Database of Systematic Reviews* 2004, Issue 4. Art. No.: CD004958. DOI: 10.1002/14651858.CD004958.

CRG名: Back

[最新版\(英語版\)はこちら](#)

英語版最終改訂年月: 31 July 2004

Clib issue No.; N/U: 2007 issue 3; -

背景: 頸部脊椎症治療として除圧および堅固な椎体間固定のための外科的手技の数が急速に増加しているが、様々な術式からの選択に関する理論的根拠は明らかでない。

目的: 本研究は、椎間板変性症患者において1椎間または2椎間の前方椎体間固定術のどちらの術式が最も良好な臨床的および放射線学的アウトカムをもたらすかについての評価を行うことを目標とした。

検索戦略: Cochrane Central Register of Controlled Trials(2004年第1号)、MEDLINE(1966年~2004年)、EMBASE(1980年~2004年)、およびCurrent Contents(1996年~2004年)の電子データベースをコンピュータで検索し、研究を同定した。選択した論文の参考文献も検索した。

選択基準: チェックリストを用いて、2名のレビューアが同定した参考文献を独自に選別した。話し合いを通じて合意に達した。合意に達することができなかった場合は、第三のレビューアに相談した。選択基準は以下の通りであった。論文はランダム化比較研究についての報告であった。治療では頸椎前方除圧術と前方椎体間固定術とが比較された。参加者は、慢性(12週間を超える)の椎間板変性と診断されており、手術が計画されている人であった。

データ収集と分析: van Tulderの基準リストを用いて、2名のレビューアが独自に方法論の質を評価した。データ抽出書式を用いて、2名のレビューアが独立に群の特性、介入の詳細およびアウトカム指標に関するデータを抽出した。

主な結果: 患者939例を対象とした14件の研究において、異なる固定術について3つの比較評価が行われた。これらの比較から、椎間板切除術単独の方が椎間板切除術と固定術の併用よりも手術時間、入院期間および術後の休業期間が短いと思われるが、疼痛緩和および固定率については統計学的に差はなかった。自家移植片を用いた固定術は、ケージを用いた椎体間固定術よりも固定する可能性も高いと思われるが、その他のアウトカム変数は統合できなかった。

レビューアの結論: 試験の質が低いことから、本レビューから広範囲の結論を得ることはできない。方法論および報告がより良質な多くの研究がさらに必要である。前方椎体間固定術の評価のためにどのアウトカム・パラメータを用いるべきかについては、研究者の間でさらに一般的合意が必要である。

(監訳 柴田 実)

翻訳公開日: 07年10月5日

ご注意: この日本語訳は、臨床医、疫学研究者などによる翻訳のチェックを受けて公開していますが、訳語の間違いなどお気づきの点があれば、Minds事務局までご連絡ください。なお、コクラン・ライブラリは年4回改定版が発行されます。Mindsでは最新版の日本語訳を掲載するよう努めておりますが、編集作業に伴うタイム・ラグが生じている場合もあります。ご利用に際しては、最新版(英語版)の内容をご確認ください。